

# 全海運所属組合の横顔

## 連載 第11回

# 中国地方海運組合連合会

## その3 岡山中部海運組合

### 岡山県の実海運組合

中国地方海運組合傘下の岡山県の実海運組合には、岡山中部海運組合と岡山県西南海運組合の2組合がある。

元々、県下には岡山地区海運組合（岡山市）、西大寺地区海運組合（現岡山市）、神島地区海運組合（現笠岡市）、北木島地区海運組合（現笠岡市）、笠岡地区海運組合（笠岡市）、片上地区海運組合（現備前市）、日生地区海運組合（現備前市）、柵原地区鉍石輸送組合（現久米郡）、玉野地区海運組合（玉野市）、玉島地区海運組合（現倉敷市）の10地区海運組合があったが、昭和48年（1973）8月にこのうち日生、笠岡、玉島、柵原の4地区組合が中海連を脱退して全日本内航船主海運組合（全内船）に移籍し、元々全内船との重複加盟者が大多数を占めていた西大寺地区海運組合もこれに呼応して中海連を離れ、片上地区海運組合が日生地区に統合されたことから4地区組合が中海連に残った。その後、昭和59年（1984）6月に運輸省（現国土交通省）が通達した「内航海運構造改善指針」で地区組合の統合方針が示されたことから、残った中海連傘下の岡山県の地区組合のうち61年（1986）8月に玉野地区海運組合と岡山地区海運組合が合併して岡山中部海運組合となり、同年（1986）11月に神島地区海運組合と北木島地区海運組合が合併して岡山県西南海運組合となった。

一方、全内船に移籍した組合の中でその後、柵原地区は元々が化学肥料原料の硫化鉄鉍が産出された柵原鉍山からの出荷貨物を輸送する海運業者により構成されていたが、昭和50年（1975）頃には硫酸原料としての需要がほぼ途絶え、事業者数も漸減し組合が消滅。玉島地区、西大寺地区は統合して全内船傘下の倉敷地区海運組合となり、笠岡地区は主要19事業者が平成26年（2014）6月に中海連傘下の西南組合に統合して、組合を解散した。

現在岡山県には中海連傘下の中央組合と南組合の2組合と全内船傘下の日生地区、倉敷地区の2組合がそれぞれあるが、岡山船主協議会を設けて独自に会費を徴収して予算を組み、情報の交換を図る一方、研修会などの事業を開催して協調を図っている。

### 【岡山中部海運組合の概要】

事務局 〒706-0011 岡山県玉野市宇野 1-18-15 宇野福祉センター 2階

電話 0863-31-1657 FAX 0863-31-1657

JRJR 宇野駅下車徒歩約10分

理事長 伏原 直 栄吉海運(株)代表取締役社長

事務局長 宮内 好夫 事務局長

事務局員数 男子1名（事務局長含む）

組合員数 登録運送事業者 3社

登録貸渡事業者 1社

利用運送事業者 4社

合計 8社

所属船腹量 貨物船 8隻 5,319 重量トﾝ

油送船 3隻 1,034 m<sup>3</sup>

曳船 1隻 1,750 馬力

台船 4隻 4,795 重量トﾝ

合計 18隻 12,818 重量トﾝ



事務局のある玉野市宇野港 (Yahoo! 地図)

## 地場貨物が発展阻害要因

### 【組合の組織】

岡山中部海運組合の前身の岡山地区海運組合、玉野地区海運組合はともに、ルーツが昭和13年の国家総動員法で地元事業者が統合された宇野海運(株)である。同社はその後、岡山機帆船(株)と改称されたが、戦後は小型船海運組合法の施行に伴い昭和33年(1958)7月に岡山地区海運組合と玉野地区海運組合が設立され、統制会社が発展的解散した経緯がある。

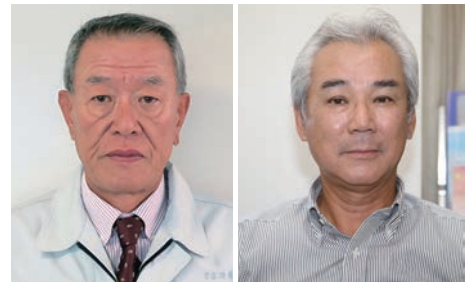
日比町と宇野町が合併して玉野市としての市制が敷かれたのは昭和14年(1939)だが、それ以前の昭和3年(1928)に玉野港(現宇野港)が完成。その2~3年後に岡山駅から宇野線が開通、宇高連絡船(現在廃止)も就航するなど、輸送網が整備された。当時は機帆船による阪神航路も開設されていた他、香川県との往来も活発だった。また、昭和4~5年(1929~1960)頃には宇野~大連(中国)に、月2航海の割合で照国郵船の貨客船『照国丸』(照国海運、7,000総ト)も就航、復荷に豆类など穀物を輸入していた他、大型の外航船も不定期で入港していたが、日中戦争の勃発とともに途絶えた。

岡山県の中央部を南北に伸び、岡山市など3市4町1村を流域とする旭川の河川港である宇野港は、古くから海上輸送よりむしろ鉄道輸送の優先されて来たことが立ち遅れの原因となっていた。また、海上輸送は復荷が少ない地域性で、片荷航海を余儀なくされたため船社が育たず、回漕業や取扱業中心の地域だった。戦前から戦後にかけて同港の出荷貨物は三菱鋁業、三井鋁業の耐火煉瓦や藺草、材木、塩と犬山諸島の石材だった。また、入荷貨物は三井造船(現三井E&S造船)への造船資材や船用機器関連貨物だった。

玉野地区では、昭和40年(1965)頃、木船から鋼船へ切り替わりをみせたが、依然まだ木船が主力として活躍していた。地元業者は宇野港、岡山港、水島港、日生港を仕事の基盤として販路を拡大して行ったが、船どころとしての宇野は戦前戦後を通して地元の貨物に恵まれた反面、瀬戸内中心の輸送だった制約が逆に船型の大型化を阻んだのだった。そのため、鋼船化に乗り遅れた木船船主は、鋼船化されずに徐々に衰退して行く一因となった。

さらに、港湾近代化や道路整備が物流を変え、輸入塩が需要地に直接着くようになったため、岡山県の有力な地場産業だった製塩業が昭和48~49年(1973~1974)頃から下降線を辿り、相当数の地元の塩船が廃業に追い込まれた。

令和元年(2019)10月1日現在の岡山中部海運組合の組合員数は、登録運送業3社、届出貸渡業1社、利用運送業4社の計8社で、所属船腹は貨物船8隻、5,319重量ト、油送船3隻、1,034m<sup>3</sup>、曳船2隻、1,750馬力、台船4隻、4,795重量トの計18隻、1万2,818重量ト(m<sup>3</sup>、馬力)と小規模である。事務局は、宮内事務局長がひとりで切り盛りし、宇野港運協会と岡山トラック協会玉野分会の事務局も兼務している。



伏原理事長(左)と宮内事務局長



宇野港湾福祉センター(上)と事務局



事務局入口。宇野港運協会、岡山県トラック協会玉野分会と事務局を兼務

岡山中部海運組合では、年1回の総会とその後の理事会を開催している他、必要に応じ都度、組合員に通達事項等を配布している。また、組合員の事業において、運輸局へ港湾施設の要望事項に対する要請、海難防止活動、船員災害防止活動等に関する事項をおこなっている。

## 造船関連と犬島出荷の貨物

### 【地場産業と内航海運】

岡山中部海運組合の組合員は、宇野港及び水島港が主体となった事業活動が多く、また港湾関連産業との兼業が多い。宇野港では、海運・港湾運送業とも三井E&S、三井金属日比精錬所に依存するところが大きく、一方で、備讃瀬戸各港で油送船3隻が運航されている。



宇野港 (写真提供: PIXTAS)

地元の主力産業には三井E&S造船玉野事業所、三井金属工業日比精錬所と、水島臨海工業地帯のクラレ、旭化成、JFEスチール、JXTGエネルギー、中国電力、三菱化学、三菱ガス化学、三菱自動車工業がある。中でも三井E&S造船は、玉野事業所が三井物産造船部としてスタートした発祥の地で、今日でも同社の主力事業所として重要な役割を果し、複合エンジニアリング体制を整えて造船、建設関連以外にも産業機械、エネルギー関連、化学プラント、環境関連等を造っている。近年は新技術の開発により、ゴルフのクラブヘッドのような異質の製品も数多く手掛けている。岡山中部海運組合の組合員の多くは港湾関連産業との兼業が多く、三井E&S造船に依存するところが大きい。水島工業地帯の関連では、油送船3隻が用船されている。

犬島諸島は犬島、犬ノ島<sup>おきつづみ</sup>、沖鼓島<sup>じたけのこ</sup>、地竹ノ子島<sup>おきたけのこ</sup>、沖竹ノ子島、白石(別名・白石礁)からなり、平地の少ない高峻な地形、繫船に便利な入り江のある海岸と洞穴に恵まれ、備讃瀬戸に面して海洋交通上重要な位置にあったことから奈良時代、平安時代、戦国時代は海賊の根拠地、寄港地として機能していた。犬島諸島の地質は主に花崗岩で基礎材に適したことから、旧石器時代には石器や石鏟(やじり)<sup>せきぞく</sup>が作られていた。元和6年(1620)から始まった大阪城の改修に際し、備前岡山藩主の池田忠雄が犬島の石材を切り出して船で運び、西国大名の築城にも提供したという。天正18年(1590)の岡山城改修の際には、宇喜多秀家が石垣に使用するため、筏に乗せて旭川を遡り大量に運んだとの記録がある。近代では明治30年(1897)に、大阪の安治川河口から遡った場所にあった大阪港の整備にも犬島の石材が使われ、犬島諸島全体の4分の1強に達する石材が内航船で運び込まれたとも記録されている。犬島の石材はこの他、鎌倉の鶴岡八幡宮の鳥居や江戸城、近年では京都けいはんな記念公園や京都迎賓館などにも用いられ、貴重な国内産花崗岩として利用され、瀬戸大橋の記念碑などの芸術作品にも用いられている。現在でも犬島諸島最大の島で、唯一の有人島である犬島から墓石やモニュメント用の高級石材として、コンテナで出荷されている。



犬島諸島 (Yahoo! 地図)

犬島には明治42年(1909)、帯江鉦山(現倉敷市)の公害対策として、沖合の犬島に精錬所が建設されている。一時は藤田組(現DOWAホールディングス)が買収して月産300トンの銅精錬で栄え、島の人口も5,000~6,000人を数えたが、第1次世界大戦(大正3年7月~7年11月=1914年~1918年)の終息後に銅価格が暴落し、大正8年(1919)に操業を停止。住友合資会社を買収したが、再建の目処が立たずに大正14年(1925)に廃止となっている。その廃虚は、

テレビドラマ「西部警察」のロケ現場となったこともあるが、現在は直島福武美術財団により、製錬所跡地を利用した犬島アートプロジェクトの一部として再利用されている。

地竹の子島と沖竹の子島は、かつて地続きだったが、採石が進んだ結果、現在は分断されている。かつては海砂利も採取されていたが、瀬戸内海的环境保護規制から、昭和63年(1988)以降禁止され、海砂利船が姿を消している。



犬島の石材 (写真提供: PIXTAS)

また、犬ノ島には無人島ながら、現在でも曾田香料の子会社(東レ子会社)・岡山化学工業のプロパンガス付臭剤製造工場があり、従業員は船で通勤し、製品がドラム缶に詰められ貨物船で出荷されている。【参考】岡山県ホームページ

## 海の守護神 玉比咩神社

### 【文化と伝承】

玉野市にある玉比咩神社<sup>たまひめ</sup>は海上安全の守護神として地元海運関係者の信仰が厚い。また、玉比咩神社では、新造船進水の際の支え綱を御守護「支綱」として扱っていることから船との繋がりが深い。玉比咩神社の創建年代は不詳だが、貞観5年(863)9月に太政官府所見の国内神名帳のひとつである備前国神名帳の中に記されており、遅くとも平安時代前期には建立されていたようだ。御祭神は、初代天皇である神武天皇の祖母・豊玉姫命(日本書紀。古事記では豊玉毘売命<sup>とよたまひめのみこと</sup>)。豊玉姫の父は海神の豊玉彦命<sup>わたつみ</sup>である。豊玉姫を祭神とする神社は全国に数多いが、著名なところでは霧島神宮(鹿児島県霧島市)、高千穂神社(宮崎県西臼杵郡)、高千穂神社(同)、天岩戸神社(同)などがある。

玉比咩神社は徳川時代に歴代藩主の崇敬が篤く、元禄元年(1688)に池田綱政、享保19年(1734)に池田継政が相次いで寺社奉行に命じて社殿を修復している。古来から郷土の守護神として崇敬を集め、近郷近在からも参拝者が常に絶えなかった。創建以来、社号は度々変遷し、中世には玉比咩明神、近世では八幡宮と称したが、明治2年(1869)に旧号玉比咩神社に復した。明治40年(1907)9月、神饌幣帛料供進神社に指定された。現在の社殿は本殿を除き昭和2年(1927)の改築によるものである。

玉比咩神社には、御神体の巨岩が祭られている。玉野地域は古代、「玉の浦」と呼ばれていた。「玉」は、玉比咩神社の御神体に由来する。昔、玉比咩神社付近は入江で、境内にある「立石」と言われる巨岩は珍しく、人々は舟を停めて屢々ここを訪れた。この立石からある夜、火の玉が3つ飛び出し、1つは玉比咩神社背後の臥龍山中腹の臥龍稻荷神社奥宮に、1つは西大寺の観音に、そして残る1つは牛窓に向かったといわれ、その火の玉の出た所は今も丸く日輪の形に残っていると伝えられる。



玉比咩神社(上)と御神体の巨岩

### 取材こぼれ話

#### 伝説の街

現在の玉野市は古代、「玉の浦」と呼ばれていたが、「玉」はその形状から玉比咩神社の御神体に由来し、その御祭神の豊玉姫は、竜宮伝説の乙姫としても知られている。また、桃太郎伝説では供の犬が鬼退治の褒美に得た島が犬島の起源ともされる。いかにも伝説の多い岡山ならではの感じだ。(中島)